

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	American Heart Association(AHA)2012
作成者(著者)	坪田, 貴也
公開者	東邦大学医学会
発行日	2013.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 60(3). p.176 177.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.60.176
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD00612271">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD00612271</a>

## American Heart Association (AHA) 2012



坪田 貴也

東邦大学医学部内科学講座循環器内科学分野 (大森)

American Heart Association (AHA) 2012 が2012年11月3～7日までロサンゼルスで開催された。AHAは世界中の心血管疾患の権威たちによるプレゼンテーションや議論を通じて最新の技術や情報に触れられることができる循環器領域の世界最高峰の学会であり、毎年多くの参加者が集まり、今年は約18000人が参加した。

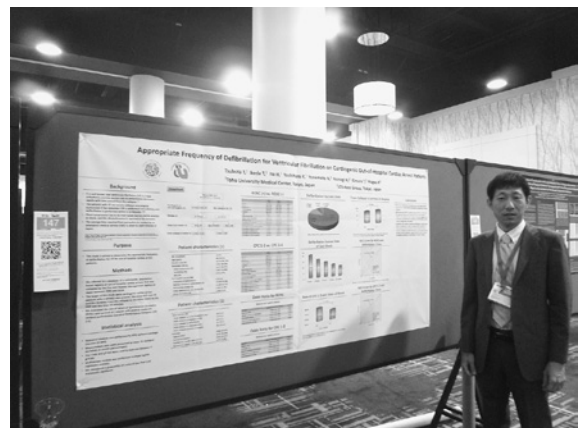
AHAは循環器全般部門の Scientific Sessions, 救急蘇生部門の Resuscitation Science Symposium (ReSS) に分かれている。1974年にAHAは世界で初めての心肺蘇生のガイドラインを作成し、その後も数年ごとに改訂を行っており、救急領域ではこのReSS部門で発表された内容が、Basic Life Support (BLS) といった1次救命処置や Advanced Cardiovascular Life Support (ACLS) といった2次救命処置の礎となり、救急現場でのスタンダードとなっている。今回、このReSS部門で発表の機会を得ることができた。

11月2日、出発当日は夕方まで通常業務を行い、深夜0時頃に羽田国際空港(東京国際空港)を飛び立った。大森病院から羽田空港までは約20分程度であり、このときは大森病院が羽田空港に近くて良かったと感じた。約9時間の飛行を終え Los Angeles 国際空港に到着した。相変わらず入国審査には長蛇の列ができていたが、審査では何故か“あなたは医師か? 学会に行くのか?”の質問だけで、すんなり入国できた。審査官にもその学会が知られており、学会のスケールの大きさを実感した。

約2万人が参加する学会とあって、学会会場近辺のホテルは早くから満室となっており、ホテルの手配が遅れたため、会場から車で約30分程度かかる高級住宅街のあるビバリーヒルズのホテルとなった。しかし、会期中は各ホテルから学会会場までは毎時間シャトルバスが運行しており、このホテルも例外でなく、シャトルバスで学会会場まで行



学会会場



ポスターセッションでの発表風景

くことになった。

11月3日、発表当日は朝から快晴であった。事前登録はしていたものの、会場が広すぎて、受付や発表会場に行く

までかなりの時間を要した。

発表はポスターセッションで、演題は「Appropriate Frequency of Defibrillation for Ventricular Fibrillation on Cardiogenic Out-of-Hospital Cardiac Arrest Patients」という内容で発表した。心室細動の有効的治療は電気ショックであるが、ショックの成功率は時間が経つにつれて急速に低下する。また、除細動の解析やショック時は胸骨圧迫を中断せざるを得ず、その胸骨圧迫中断の有害性も報告されており、院外心肺停止患者の心室細動に対しての適正な除細動回数を明確にする、といった内容である。救命士による抗不整脈薬の投与が認められていない日本にとっては、除細動抵抗性のものは早期搬送が重要である、といった内容である。

日本からの演題が多数あり、日本人の参加が多い印象で

あった。プレホスピタル、蘇生行為の質の向上や蘇生後の管理など、さまざまな発表に対し活発な討論がされていた。その会場で偶然、以前に勤めていた病院での同僚にも出会えた。昔話や現在の研究内容や今後の展望についてさまざまな話ができる。

翌日、小児科の佐地教授と現在アメリカに留学中の中西先生と合流し、会場の隣にあるステイブルズセンターでNBAの試合を観戦した。TVでは何度か見たことはあったが、人生初の観戦で、応援の仕方や選手の名前などは全く知らなかったが、その臨場感や迫力、ファンを飽きさせない演出などは、日本では味わえないものであった。

短い期間での参加であったが、日本で開催される学会とは違うスケールの大きさを肌で実感できた。今後も、このような国際学会に継続的に参加したいと思った。